

【第86回生涯教育講座】

島根大学疾病予知予防研究拠点

—ユニークな疫学研究を目指して—

なび か とおる
並 河 徹

キーワード：コホート研究，遺伝子多型，ソーシャルキャピタル，生活習慣病

1. はじめに

島根大学では，学部横断的な教員で構成する「疾病予知予防研究拠点」を起ち上げ，大規模なコホート研究を実現するための基礎作りを開始した。本稿では，その概要について述べたい。

2. 疫学的研究の現状と必要性

疫学研究には4つの方法論がある（図1）。横断的研究とは，ある時に行った健診で集めた対象者について，その時点での血圧とその時点での心肥大の程度の関連を調べる，といった手法であり，たとえ関連が見つかったとしても「血圧」と「心肥大」はどちらが原因でどちらが結果か論理的に言及することはできない。後ろ向き研究（患者対照研究）では，現在肝硬変のある患者群とない対照群を設定し，10年前に「遡って」飲酒量を両群で比較するという手法である。この場合，「飲酒量」の方が時間的に先であるので，もし両群で10年前の飲酒量に差があれば，それが原因で肝硬変は結果だと推定できる。しかし，この場合は患者群と対照群を人為的に選ぶため何らかのバイアス

がかかるおそれがある。また，10年前に肝硬変（あるいはその兆候や基礎疾患）がなかったかどうか不明のことが多いため，因果関係にも疑いが残る。これに対して前向き研究では，年齢などの要因を考慮の上で，ある時点で無作為に住民を抽出して（これをコホートと呼ぶ）喫煙の程度を調べ心筋梗塞やその基礎疾患についての情報も確認しておく。10年間追跡調査して心筋梗塞発症者を把握し，（他の条件を揃えた状態で）喫煙量の多かった者がより多く心筋梗塞になったかどうかを調べる。これは最も信頼性の高い方法だが，心筋梗塞のように罹患率が数千人にひとりといった疾患の場合には非常に規模の大きなコホートを準備する必要があり，また，長期にわたる追跡をする必要があるため，コストや時間の面で大変な方法論である。最後の介入研究は，食塩摂取を制限したグループとしていないグループで10年後に血圧上昇を比較するというものであり，前向き研究より更に確度は高くなるが，コストや労力も更に要求される。

循環器系疾患をターゲットとした前向き研究として最も有名なものがフラミンガム研究である。60年前に米国東海岸のマサチューセッツ州フラミンガムで始められたもので，現在も継続されており，高コレステロール血症が虚血性心疾患の危険

Toru NABIKA

島根大学医学部病態病理学

連絡先：〒693-8501 出雲市塩冶町89-1